

[23\_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :  
23(4)

<https://doi.org/10.15017/18005>

---

出版情報 : 図書館情報. 23 (4), pp.27-38, 1988-01-29. 九州大学附属図書館  
バージョン :  
権利関係 :



九州大学附属図書館報

# 図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 23, No. 4 (1987, 10~12)

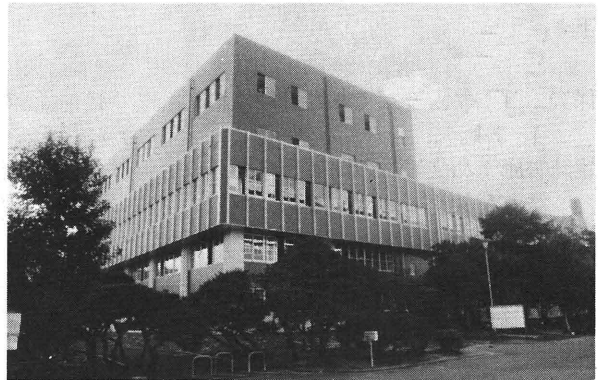
## 目次

- 中央図書館書庫完成にあたって ..... 27
- 今どき閉架式とは——  
ゲームシユタツト工科大学 (THD) 中央図書館 ..... 30

## 中央図書館書庫完成にあたって

図書館長 平 嶋 義 宏

一昨年10月から着工していました中央図書館書庫増築が約1年で終了し、9月16日に完成いたしました。今回の増築分は地下1階、地上5階の5,110㎡で、従来の面積と合わせて13,170㎡の図書館に成長いたしました。外観も見事に出来上がり、九州大学を象徴する建物の一つになったものと思います。このように立派な図書館が出来上がりました事は、誠にご同慶に堪えない次第であります。



今回の図書館増築の特徴は、図書の収納スペースの増大であることは言うまでもありません。地下1階には集密書架を設置しましたので、約30万冊の本を収納することができます。収納スペースの増大に伴い、やや余裕ができましたので、従来の閲覧室をひろげるとともに、ここに開架する参考書などの種類も増やし、豊かな気分で利用して戴くことにしたいと思っています。

また、5階の貴重図書室の横には教官の皆さんに静かな思索を楽しみ、創造的な知的活動を行って戴くための部屋を用意したいと思っています。学生諸君のための自由閲覧室はスペース、雰囲気ともに一段と向上し、すでに多くの諸君に利用してもらっています。

また、今回の増築を機に、雑誌の配架を大幅に改善したいと思います。早速、洋雑誌については中央図書館・理学部・農学部の蔵書を統合して一元配架とすることが決まっています。これによって雑誌などは一段と便利に利用できましょう。

もう一つの大きな特徴は、250名収容の大視聴覚ホールができたことです(従来の視聴覚室はとりこわしました)。4階のフロアー全部を使っています。この視聴覚ホールは、全学の皆さんがいろいろな教育・研究発表などの活動のために利用して戴くためのものです。このような大視聴覚ホールをもっていることは、全国の大学図書館でも珍しいケースかと思われます。どうか積極的かつ有効に利用して下さい。

私は夜の校庭を歩いていて、図書館の窓に明かりがともり、静かな時が流れているのを見ると、これほど楽しく、幸せを感じる時はありません。また、一種の感動さえも覚えません。閲覧室で熱心に読書に耽っている学生諸君の姿を見るのも頼もしい限りです。私共図書館関係者は、今回の増築完成を契機に、大学図書館の本来の使命である学生諸君の学習、学生の教育、教官の研究の支援のために、一層の努力を払いたいと思います。また、特徴のある九大図書館に育てることも念願の一つです。

全学の皆さんには従来にもまして中央図書館を利用して戴くと共に、「私共の図書館」を育てていくために、倍旧のご支援をお願い致します。

最後になりましたが、今回の書庫増築については、前学長の田中健蔵先生、現学長の高橋良平先生や事務局長はじめ事務当局の方々の絶大なご支援を戴きました。又、前館長の高野桂一先生と前農学部長の大村武先生には殊の外のお骨折りをいただきました。書庫増築の用地については農学部教授会が快く農学部の敷地を割愛していただきました。ここにこれらの関係者の方々のご協力にたいし、衷心からお礼を申し上げます。

## 各 階 の 配 置

各階に予定されている新たな利用スペース及び用途は次の通りです。それぞれ平面図をご参照下さい。

### 地 階

保存書庫：集密書架で収容冊数は約300,000冊が可能であり、利用度の少ない図書、雑誌等を配架。

#### 1 階

雑誌書庫：和文雑誌の開架書庫で、収容冊数113,000冊、中央図書館と理学部、農学部の和文雑誌を配架する。欧文雑誌は既設の書庫に一元配架替する。

#### 2 階

新刊雑誌閲覧室：新刊雑誌2,500タイトル収容可能で和文・欧文雑誌の最新版を展示し、座席38席を設ける。

自由閲覧室：学生が自習の場として自由に利用できる。座席100席を設けている。専用出入口は1階東出入口。

#### 3 階

開架閲覧室：開架図書39,000冊が収容可能であり、既設の開架コーナーと併せて約60,000冊が配架できる。閲覧座席は100席を設ける。

マイクロ資料室：分散していたマイクロ資料(マイクロフィルム、フィッシュ資料)を集約化して、最新鋭のリーダープリンターを設置して利用者の便を図る。

#### 4 階

視聴覚ホール：250名収容の多目的ホール。16mm映写機、スライド、OHP、ビデオ等の機器を用いて講演会、学会など教育・研究発表などの活動に利用。

会議室：図書館商議委員会など諸会議に使用。座席数38席。

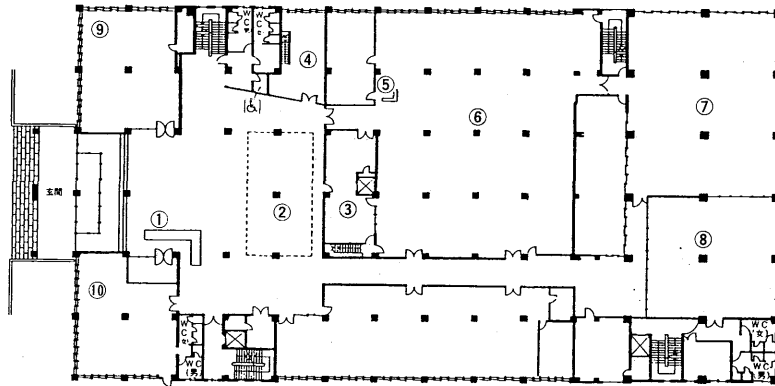
#### 5 階

貴重書庫：特殊文庫等貴重図書を保管する。約22,000冊収容できる。

特別閲覧室：貴重図書の閲覧及び教官の知的な談話室として利用。

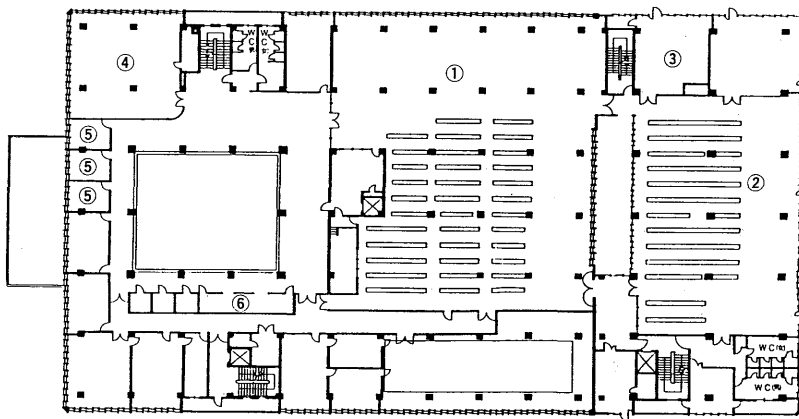
標本室：農学部の植物、昆虫等の標本展示及び保管(旧農学部図書室に保管の分)。

増築改装なった新図書館は本年4月から本格的に機能する予定ですが、その間、機器の搬入、図書資料の移設等で利用者至今已らくご迷惑をおかけすることと思いますが、ご理解の程お願いします。



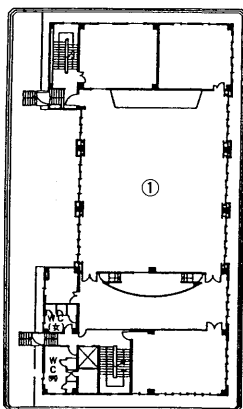
- ① 受付カウンター
- ② 学内総合目録
- ③ 新聞資料室
- ④ 複写センター
- ⑤ レファレンス・デスク
- ⑥ 参考図書閲覧室
- ⑦ 新刊雑誌閲覧室
- ⑧ 自由閲覧室  
(1階東出入口が専用出入口です)
- ⑨ 農学部図書掛事務室
- ⑩ 理学部図書掛事務室

2階平面図



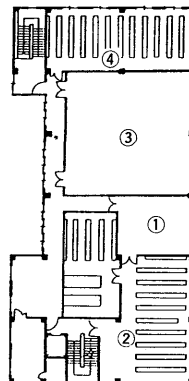
- ① 開架・指定書閲覧室
- ② 開架閲覧室
- ③ マイクロ資料室
- ④ ブラウジングルーム
- ⑤ 演習室
- ⑥ 語学演習室

3階平面図



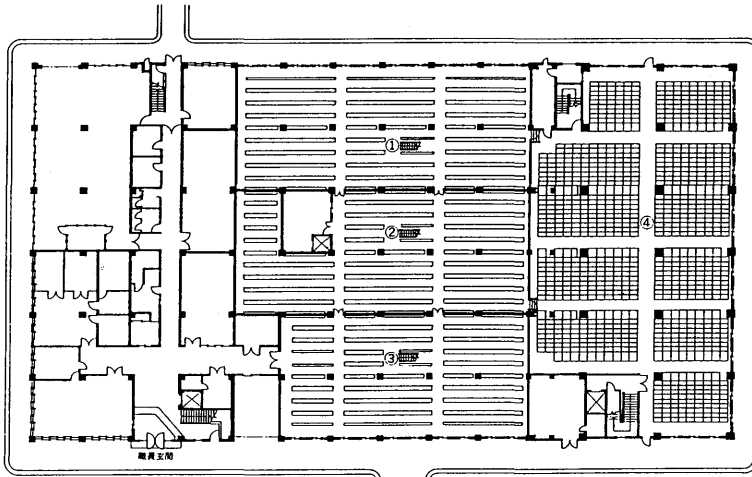
- ① 視聴覚ホール

4階平面図



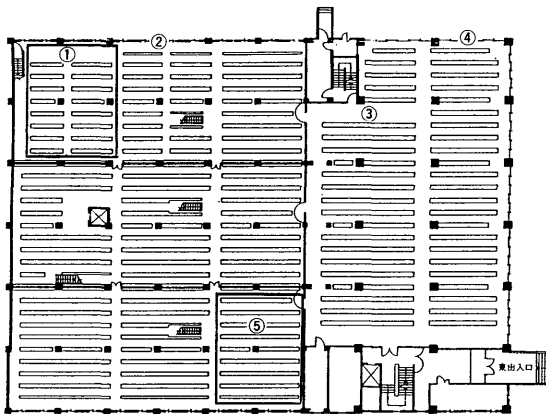
- ① 特別閲覧室
- ② 貴重書庫
- ③ 標本室
- ④ 書庫

5階平面図



B階平面図

- ① 書庫 (中央図書館単行本)
- ② 書庫 (農学部単行本)
- ③ 書庫 (理学部単行本)
- ④ 保存書庫



1階平面図

- ① 特許公報, 公開特許公報
- ② 欧文雑誌
- ③ 和文雑誌 (中央図書館)
- ④ 和文雑誌 (理・農)
- ⑤ 理学部数学科  
(欧文・和文雑誌)

## 今どき閉架式とは——

### ダームシュタット工科大学 (THD) 中央図書館

河野光雄

ダームシュタットはフランクフルトから南へ快速郊外電車で20分、オーデンバルドの北辺に位置し、薬品メーカーのメルクと大学でもっている小さな街である。ここも先の大戦でガレキの山と化したところで、復興なったとはいえ、オペラ座は今だに戦災にあったその姿をさらしている。あまりにもその被害が大きかったので、新しい市民劇場を建てたが、コンクリートのかたまりのような建物は人気なく、オペラ座の修復を求める声におされて、ようやく工事にとりかかったところという。アールヌーボの発祥の地としてヨーロッパの建築様式をリードした一時期を誇りにしている土地柄らしい話である。ヘッセン王の居城(シュロス)は1965年に修復なり、一部は王家の宝物を陳列する博物館に、残りは大学の中央図書館と学生会館になって、勉強を終えてから、演劇、コンサート、ディスコそして政治集会とそれぞれの夜を楽しむようになっている。

大学の歴史は1821年に工業専門学校として出発したことにさかのぼる。1836年に工業高等学校 (Technische Hochschule Darmstadt)となり、1877年に、



ビスマルク宰相の富国強兵政策のもとで大学に格上げされ、7学部となった。この時同時に昇格したベルリン、ミュンヘン、シュツットガルトなどはいちはやく工科大学と名称をかえたが、ダムシュタットはその歴史を誇示すべく、THDの名称をそのままひきつぎ、ために、歴史に頼着しない人々に、文字通りの意味 Hochschule = High School と誤解されるはめになってしまった。今日20学科からなり、教授2,000、学生総数15,000というから、九大と同規模の大学といえる。1971年には Gerhard Herzberg (物理学科教授)がノーベル化学賞(「分子の電子構造と幾何学」)を受賞、今年の高温超電導で物理学賞に輝いたMüller博士はTHDの卒業生である。大学としての活力を維持するために、スクラップアンドビルド政策が積極的にとられており、物質科学研究所設立構想がうちだされ、不活性学科のとりつぶしが議論されはじめたという。日本のように学術審議会の評価にもとづいて文部省主導で研究所の統廃合・改変がすすめられるというのではなく、大学自身の自己評価によって改革をすすめる「理性」に感心させられたが、その内実たるや想像にかたくない。

中央図書館には、天床を支えるようにして立つ巨大な彫像のならば回廊を通って入る。受付けを通り、分類カードのならば部屋をぬけてびっくりした。カウンター越しに、職員と学生とが本や書類のうけわたしをしている。まぎれもない閉架式図書館なのだ。旧世紀の遺物とばかり思っていた閉架式が、この眼の前に息づいているという驚きである。14世紀のヨーロッパで最大の蔵書数を誇る北イタリアの修道院の閉架式図書館をめぐるおこる連続殺人事件を仕立てあげた Umberto Eco の「The Name of The Rose」の情景が目にかぶ。Sean Connery主演で映画化もされているが、そのロケーションが、ダムシュタットに近いウイスバーデン(温泉保養地・カジノの街として名高いヘッセン州の首都)からライン河にむかって数10kmのところにある修道院で行われた(修道院そのものはラインガウのワイン名所として有名)ので話題となってよく覚えている。「書庫に入れないのなら、未知の本との出会いという楽しみがないではないか」とせまるフランシスコ派の修道僧に対し、陰謀にうといベネディクト派の院長は、「(写)本はもろいもので、時とともに古くなるし、ネズミや雨もれにやられることもあります。心ない人にだいなしにされることだってあります。誰れもが自由に本を扱えるようにすれば何百年の間には大部分がなくなってしまうでしょう。どんな本にも神の英智が輝いているのですから、それらを守るために生涯をかけねばなりません。」と答えている。さて現代の司書は同じ質問になんと答えたか。「この図書館の蔵書は、単行本だけで120万冊もあり、目的の本を探しあてるのさえ大変なので、出会い頭に面白い本にぶつかる幸運は期待できません。開架式がいつでも利用者の便宜になるという訳ではなく、Reference serviceを充実させることによって出会いのチャンスを増やすことができるのです。」というものであった。たしかに分類のとり方によってあらぬところに配架されたりすることもあるので、書庫の中を歩きまわるよりは、コンピューターによる検索の方が、情報量としては多いにきまっているが、中味に関する判断は、情報を提供する側ではなく、受けとる側がするものである限り、利用者はすぐ手にとって吟味出来ないもどかしさを感じる点には答え

てもらえなかった。九大の蔵書が240万冊ということを考えれば、閉架式でなければ管理できないということでもなく、カタログさえ整備されていれば、司書でなくとも本を探し出すことはそうむづかしいものでもなく、閉架式でなければならぬ納得できる理由は結局聞き出せなかった。学生に聞いてみても、とくに不便を感じずという返事はなかった。生活の中で習慣化してしまえば、不便さという意識はなくなってしまうということのようだ。もう何年も前のことだが、このTHDの教授が東京駅の本のデパートで、一時間もいたかなと思って時計をみると、四時間近くもぶらついていたことに気づいてびっくりしたと話してくれたことがあった。本との出会いは、文化との出会いであり、恋人との逢瀬のように時を忘れさせるものだから、そんなよろこびのない学生たちは気の毒である。しばらくして、閉架式は雇用政策のなせるわざではないかと思あたり、ようやく勝手に納得したのである。雇用をいかに確保するかということは、先進諸国の一様に重要な課題であるが、労働時間の短縮——一つの仕事を二人ないしそれ以上でこなすことによって雇用の増大をはかる——はその基本的な施策であるが、専門職に対しては、労働の均質化を前提としない限り、時間短縮だけでは対応できない面もあり、ポストを増やす機構の導入によって雇用を確保するという道も用意しなければならない。こう考えれば、時代錯誤の閉架式も擁護できるということだろうか。ともかく、私の滞在のスポンサーの良い点を探すことは、義務に近いものがあると感じているので。

この中央図書館は、学部学生と16才以上の市民は誰でも利用できる。市民が利用できるという点は九大も学ぶべきだろう。今や「開かれた大学」を標榜しているのであるから、地域における大学の機能の一つとして、図書館(の一部)を市民の利用に供するというのも真剣に検討されてしかるべきだと思う。各学部で開いている公開講座の盛況ぶりは、知識とその生かし方に対する強い関心を反映していると思われるからだ。THDの図書館組織は中央図書館とは別に、各学科及び研究グループが独立に、研究者用図書室をもって、それぞれ機能を分担しているという点に特徴がある。ここには、すべてを中央図書館にという馬鹿げたスローガンはない。研究者は身近かに本がおいてあるという状態を必要とするものであるが、そのことを最大限認めようというのが、各学科及び研究グループ毎の図書室運営の基本精神である。したがって無駄は承知のうえ、合理主義とは無駄をはぶくことにあるのではなく、無駄を生かすことにあるという訳である。という訳であるから、貸し出し規則も極めて鷹揚で、厚紙に、日付・名前・電話番号を記して本のかわりにたてかけておけばよい。近年専門書でさえも、ものすごい勢いで出版されるようになって、限られた予算で、研究者の要求を満たすことがむづかしくなってきたというこであったが、本の購入に際しては、実物を見てからというよりは、カタログで購入しているという事情も大きくからんでいるようだ。しかし、研究現場の図書室を中央に吸収して無駄をはぶき経済効率を高めようなどという意見は、現場ではもとより、中央図書館からも全く聞かれず、日本では中央化に熱心なグループがあるがと水をむけると、「司書は経営と管理の効率化を求める事務屋ではない。」との答えがかえってきたのには、文化の担い手としての自覚を感じさせられ、とても印象的であった。

中央図書館はダームシュタットにあるすべての図書館——企業、教会、博物館、民間団体などに付属する図書館の蔵書目録も完備しており、相互利用システムをもっている。そしてカールスルーエにあるドイツ中央情報センターとオンラインでつながっており、ドイツ中の図書館情報のみならず、世界で発行されている雑誌に掲載された論文のアブストラクトを瞬時にひきだすことができる。日本の学術情報ネットワークも同じようなものなのだろうがまだ恩恵にあづかったこともなく、その実態を知らない。情報のシステム化が進むなかで、図書館の機能、役割、運営が大きく変わろうとしているけれども、私は人の息づかいが聞こえてくるような本と図書館が好きだ。

## ◆ 研 修

## 学術情報センター総合目録データベース研修参加記

浜 崎 修 一

《とき：昭和62年11月6日～12月3日 ところ：学術情報センター》

約一ヶ月間、学術情報センター(以下、センターと略す)が実施している総合目録データベース研修(その目的と内容は、前回の研修参加報告に詳しい)に参加する機会を得た。以下、センターの目録システムとこれからの本学の目録業務との関係を概観してみることで研修報告とさせて頂くことにする。

昨年4月、全国共同利用機関として新設されたセンターの目録所在情報サービスへの参加大学は47大学となった。全国の各大学図書館のコンピュータとセンターを通信回線で結び、各大学で受入れた図書、雑誌の目録の情報を共同でデータベース化し、所在情報として研究者へ提供しようというこのサービスは、当初東京大学文献情報センターの事業として1984年12月に開始されこれが引き継がれたものである。現在の状況を数字で紹介すると(システムの内容はセンター作成のマニュアルを参照願いたい)、図書の目録データベースの所蔵レコード件数が和書約20万件、洋書約10万件、雑誌の件数が和雑誌約98万件、洋雑誌約60万件となっている(1987年11月末現在)。最近、データ増加の傾向が顕著になっており、ことに図書の入力件数の伸びは著しく、1ヶ月の入力件数でみると昨年4月に16,700件(和洋)であったのが、11月には48,759件(和洋)となっている。又、件数の増加は入力時間の短縮につながっており、同じく昨年4月と11月の比較でみると、1冊平均処理時間は12分58秒から8分3秒へと短縮されている。今後、各大学図書館のシステム化の進展、学術情報ネットワーク網の拡張、システムの改善、遡及データの提供などに伴って更にこのサービスは拡大してゆくと考えられる。

本学においてもセンターのこの目録所在情報サービスへの参加について、センターからシステム仕様が公表されて以来検討が重ねられてきた。周知のとおり、本学ではセンターより先にすでに北部九州地区国立大学図書館のネットワークシステムのもとで地域における共同分担目録の業務を1982年から行っており、安定稼働中であることから、2つの目録ネットワーク間におけるインターフェース部分の開発に関して慎重な対応をとってきた。このことは、結果的には地域目録システムをセンターの目録システムとより整合性のあるシステムにするための措置、すなわち地域システムの一部分改造やデータ変換プログラムの追加などにおいて、他大学の開発事例やセンターのシステム改造(書誌階層の問題)等を反映させることにつながった。

このような経緯を経て開発中であった本学の新しい目録システムはまもなく完成し、新年度からは一部の部局でセンターとつながった目録業務が開始される予定である。次に新しい目録業務の流れと担当者の作業を紹介する。

1. 一回の処理単位分を対象として、北部九州地域オンライン目録システム(以下、地域目録と略す)の目録作成画面で受入済のデータをIPFから呼び出し、ID等のチェックを行う(ここで目録一時Fに書き出される)。
2. 各端末からセンターへの接続を行い、1のデータについてセンター入力基準に従い目録入力を行う。センターへデータを登録(送信)すると同時に、地域目録のシステムに持つIFFと呼ぶファイルへダウンロード(取込み)を行う(PFキー操作による)。
3. ダウンロードされ蓄えられたIFFのデータは変換システム(バッチ)により、フォーマット変換、人名典拠更新などが行われ、1の目録一時ファイルへ書き出される(同一図書IDどうしの受入データと目録データが重ねられる)。

4. 目録一時ファイルに対し、必要に応じ校正を行う（3の変換においてエラーになったものが対象）。

以上述べたように、私たちは全国的な共同分担目録への参加という又、新たな転換期にさしかかっている。図書館の目録をめぐるのは、OPAC (Online Public Access Catalogue) と呼ばれる利用者向けに開放されたオンライン目録提供システムがカード目録に代わる目録として定着するのではないかと云われている。本学の中央図書館でも従来の総合目録カードの継続は行わないことになり、利用者用端末が設置されている。一方、オンラインではない目録としてジャパンマークやLCマークのCD-ROMが頒布されることになった。わずか直径12センチのCD一枚にジャパンマーク10年分約50万件が収納され、パソコンとCDドライブがあれば利用可能という簡便なシステムで注目されている。このようなニューメディアの発達は更に多様な情報の提供手段を生み出すであろう。図書館の転換期はまだ続くのかもしれない。  
(学術情報課情報管理掛)

## 第7回西洋社会科学古典資料講習会に参加して

福田 富士夫

《とき：昭和62年11月18日～11月21日 ところ：一橋大学社会科学古典資料センター》

一橋大学社会科学古典資料センター主催のこの講習会も今年で7回目をむかえた。大学図書館員その他の関係者を対象に、西洋社会科学古典資料の書誌的な概要及び収集、整理、保存に関する基礎的な知識のための講義と、研究者による社会科学ドキュメンテーション（ケース・スタディ）を内容とし、その資質の向上と古典資料の有効的な利用を図ることを主な目的としているが、その視点に大学図書館員と研究者との協力関係を深めるというもう一つの目的が据えられている点に大きな特色がある。

### 《講座日程》

第1日 11月18日（水）

- ① 古典研究の意義を考えるーブリテン経済学古典に関わってー（田添京二・福島大学経済学部教授）
- ② 書誌学(2)ー大学図書館における古版本収集についてー（小野正男・東京経済大学附属図書館副館長）
- ③ 保存ー資料保存と修復ー（金子富保・国立国会図書館資料保存課主査）

第2日 11月19日（木）

- ① 社会科学ドキュメンテーション(3)ーフランス古典経済学の展開：文献解題ー（津田内匠・一橋大学経済研究所教授）
- ② 社会科学ドキュメンテーション(4)ー簿記・会計学の古典ー（中村 忠・一橋大学商学部教授）
- ③ 古典資料の情報処理ー古典資料の書誌情報データベースと典拠ファイルについてー（松田芳郎・一橋大学経済研究所教授）

第3日 11月20日（金）

- ① 書誌学(1)ー社会科学古版本と書誌ー（東田全義・慶応義塾大学三田情報センター情報サービス課長）
- ② 社会科学ドキュメンテーション(1)ー18世紀イギリス思想史資料の諸版本などーシェルパーン伯にかかわる人たちー（永井義雄・名古屋大学経済学部教授）
- ③ 情報交換・座談会

第4日 11月21日(土)

① 社会科学ドキュメンテーション(2)—19世紀フランス社会主義の形成過程—その断面—  
(野地洋行・慶応義塾大学経済学部教授)

今年から講習時間が2時間増え、それに伴い修了証書が授与されるようになったが基本的な講座内容には昨年との違いはない。つまり(1)西洋書誌学(2)古典資料の保存、管理ならびに機械処理(3)社会科学ドキュメンテーション、その間に情報交換・座談会と同センター見学を挟むという構成になっている。しかし偶々手に入れた第3回(1982年)の内容と比較すると、まる1日あった古典目録法講義・演習が消え、新たに機械検索が登場し社会科学ドキュメンテーションが増える等実務的な側面が薄められている点とともに、情報・ドキュメン関係の比重が高まっていく図書館をめぐる近年の潮流が窺えて興味深い。又、書誌学と保存・管理は図書館サイドから、情報・ドキュメンテーション関係は研究者サイドからの議義になっており、受講者の中にも研究者がいることと合せ「研究者との交流」という主催者側の意図を二重に読みとることができた。

その研究者サイドからの講義についてだが、講座日程からすると社会思想史関係と経済学史関係がほぼ半々で商学関係(会計学)が新たに加えられたという感じであるが、講師の陣容がほとんど経済学畑からであり、法学畑の講師が今年消えた点は、社会学史をも含む多様なアプローチを期待する欲張りにとっていささか不満が残った。もっとも社会科学の形成以前から形成期にかけてのドキュメンテーションに、経済学だの政治学だのという近代の学問体系による区分を求めること自体ほとんど無意味ともいえようが。例えば(3)「フランス古典経済学の展開」で、モンテスキュー著『法の精神』の社会学・経済思想史上に占める重要な位置について言及されたように。又、これらの講義はいわゆるケース・スタディがその主な柱であり、それぞれの分野において各研究者がいかに資料に出会い、いかに自らのテーマにアプローチしていったかという、いわば研究の軌跡を追体験させようとする仕組みになっており、一方的に知識を伝授する形でないことからもさしたる不都合はないともいえよう。例えば冒頭の「古典研究の意義を考える—ブリテン経済学古典に関わって—」では、『国富論』のアダム・スミスとフランス博物学との関わりの中でレオミュールの『昆虫記』が日本でただ1セット九大農学部部に所蔵されていることをさぐりあてられた経緯が述べられた。

以下、実務に関連する点を中心にいくつか印象に残ったことを記しておく。まず我々にとって切実な古典資料の「保存」についてであるが、広く関心をもたれている酸性紙問題は、ヨーロッパでは水溶液法(パロー方式)、アメリカやカナダではジエチル亜鉛法による脱酸処理が、手間、コスト・危険性等それぞれいくつかの問題点を抱えながらも既に日常的に行われていることが報告された。又、修理、修復についての技術や設備・業者を満足にもたない我々にとっては、生半可な修復を試みるよりは原形保存の方がより得策であるとして、埃をシャットアウトできる簡便な函の作り方を教わった。(因みに同センターでは貴重書に装備を施す代りに蔵書票を挟み込んでいただけである。)もっとも、そこには書誌学的な価値と利用との兼ね合いについて適切な判断力をもったライブラリアンの存在が前提になっていることはいままでもないが。

その書誌学のうち「大学図書館における古版本収集について」では、古版本の範囲から貴重書の指定・収集方針、古書販売カタログの見方、異版・偽版・海賊版・覆刻版の区別まで豊富なサンプルを示して詳述された。そして高価な稀観書や古版本を蒐集する意義として、人類の知的財産を後世に残すことは図書館の重要な使命であること、原本の形で直に古典に接することにより人智の深さに触れ学問研究への意欲が啓発されること、覆刻版には重大なミスがあることが多く初版本を参照する必要のあること等をあげられた。又、常日頃よりカタログに接し、古書市場の動向に注意し、実物に触れ目を肥すとともに書誌学の教養と専門分野への関心のみならずマイナーな特殊言語についても知識をもつ必要性を強張された。折しもグロチウス著『戦争と平和の法』

の初版本を643万円で購い、そのコレクションを一段と充実させた法学部でその目録に携わった者として、大変意義深く拝聴したが、又その研鑽の道のりの遠さを痛感させられた次第でもあった。

「古典資料の情報処理」では、古版本の機械検索の一例として、英米共同事業によるESTC (Eighteenth-Century Short Title Catalogue) のデータベースがBLAISE (British Library Automation Information Service) を通して検索できる事情が紹介された。ESTCは17世紀版までのような冊子体目録とは異り計算機可読型の目録であるが、単なる書誌ではなく、所蔵箇所や典拠文献が明示されている点は、標題中の語彙と組合せた検索による様々なアプローチを可能にし、社会科学の、特に溯及的な文献検索を必要とする研究者には利用価値の高いものとされている。

「研究者との交流」の最も直接的な場である情報交換・座談会では、事前のアンケートをもとにそれぞれの図書館や研究者の、古版本をめぐる現状や要望が述べられた。とりわけ印象深く残っているのは約二割を占める若手研究者の中から示された、本を情報としてしか扱わない図書館界の趨勢(例えば機械化に伴うカード目録の廃止等)への憤りや、研究の歓びと意欲の源泉ともいえる古版本により機会多く接したいという立場からの、本を「もの」として大切にすぎる図書館側の管理・運用に対する不満であり、又、それらに対し、「情報」サービスと「もの」の管理の狭間で立ちすくむライブラリアンの懊悩ぶりであり、丁々発止のやりとりの中で次第に顕かになってきた予算・制度的な障壁へのもどかしい思いである。しかし、研究者の古版本への熱い想いと研究への強い意欲に直に触れることができたのは何よりの収穫だったし、又、減る一方の人員、増え続ける仕事量の中で日常業務に追われながらも、古版本の自主的な研究会をつくり研鑽を積んでいるライブラリアンの「輪」が存在することを知りえたのも大きな励みになった。そして、今後も古典の面白さを広く識ってもらうため展覧・広報に努めるなど、開かれた貴重書をめざして研究者とより協力していく必要を強く感じた次第である。

最後に、今回、中・四国、九州よりの受講者は31名中わずかに2人(昨年は33名中、九大の1人だけ)であったが、経験不足にもかかわらず受講のチャンスに恵まれた幸運に感謝するとともに、仄聞するところ、当社会科学古典資料センターは「全国共同利用センター」として遠からず独立する運びとか、それを機に、この意義深い講習会に限られたライブラリアンの為の特殊なものでなく、ローカルな中小図書館からも多数が参加できるような、一般的だが必須の講習会に変身せんことを切望しながら拙い報告を終わる。

(法学部図書掛)

## ◆ 会 議

### 第25回日本薬学図書館協議会九州地区部会

《とき：昭和62年11月2日 ところ：九州大学附属図書館医学分館》

今回は、当番校本学薬学部図書室の主催で、加盟館6館から12名が参加して開催され、本学薬学部図書委員長(代行：同図書主任)を議長に選出し、昭和61年度決算及び監査報告を承認したあと、次の議題につき審議を行った。

1. 薬学図書館協議会九州地区各加盟館の医学図書館協会への参加について。
2. 九州地区における薬学図書館協議会研究集会全国大会の開催について。

審議のあと、本学薬学部正山助教授の「身近な薬草」と題する講演及び本学医学分館朝倉専門員の「意志伝達と再現性」と題する談話会を行った。

本学薬学部からは、加藤図書委員長(附属図書館商議委員兼医学分館運営委員)、的場事務長、川口庶務掛長、永井図書主任及び梅宮事務補佐員が出席したほか、医学分館朝倉専門員がオブザーバーとして参加した。

また、次期当番校は、第一薬科大学図書館に決定した。

((( 図書館統計 )))

昭和61年度 文献複写受付統計・相互利用統計

中央図書館

種別 区分	電子複写		引伸		マイクロフィッシュ		合計		文献複写	相互貸借 (冊数)		他機関利用 (件数)
	件数	枚数	件数	枚数	件数	シート数	件数	枚数		受付(学外から受付した件数)	依頼(学外へ依頼した件数)	
国立大学	4,447	52,197	4	18	2	34	4,553	52,249				
公立私立大学	1,399	17,646	4	337			1,403	17,983				
上記以外	1,072	10,764	1	24			1,073	10,788				
合計	7,018	80,607	9	379	2	34	7,029	81,020	受付(学外から受付した件数)	8,543	依頼(学外へ依頼した件数)	3,201
									計	11,744		
									受付(貸出)	325	依頼(借用)	165
									計	490		
									国立大学図書館間共通閲覧証	41	学外図書館利用依頼状	112
									計	153		

昭和61年度 文献複写依頼統計・学内複写等統計・全学共同利用複写機統計

中央図書館

項目 部局	学外へ文献複写依頼件数			学外文献複写等受付件数				合計	全学共同利用複写機 枚数
	校費	私費	計	複写	引伸	マイクロフィッシュ	計		
文学部	147	680	827		4		4	831	9,663
教育学部	61	138	199			1	1	200	18
法学部	169	162	331					331	299
経済学部	25	80	105					105	697
理学部	128	67	195	45			45	240	252,696
医学部				26			26	26	0
医学部附属病院				3			3	3	0
歯学部				18			18	18	752
薬学部									1,525
工学部	621	74	695	58	3		61	756	49,995
農学部	283	270	553	8	9		17	570	244,583
農学部附属農場									3,136
農学部附属演習林									799
教養部				246	1		247	247	5,757
生体防御医学研究所	13		13	6			6	19	0
大学院総合理工学研究所	145	6	151	25			25	176	10,015
応用力学研究所	49		49	72			72	121	547
生産科学研究所	29	5	34	18			18	52	5,191
健康科学センター	31	12	43	36			36	79	0
医療技術短期大学部									23
情報処理教育センター									0
大型計算機センター		1	1					1	6
アイントープ総合センター	1		1					1	
75年史編集室	1		1					1	
図書館		3	3					3	749
事務局				1	1		2	2	1,031
合計	1,703	1,498	3,201	562	18	1	581	3,782	587,482

————— 本学教官著作寄贈図書 —————

〈中央図書館〉

徳本 正彦 (法)  
政治学原理序説 — 全体的認識へむけて—  
九州大学出版会 昭62

長 智男 (農)  
新農業水利学  
朝倉書店 (昭62)

〈教養部分館〉

目加田 誠 (名誉教授)  
漢詩日曆  
時事通信社 昭62

杉浦 実 (養)  
DDR 文学選集 1  
ワイマル友の会九州支部

〈経済学部〉

北原 貞輔 (経)  
システム思考の源流と発展  
九州大学出版会 昭62

市村 昭三 (経)  
運転資本管理 (現代企業財務シリーズ)  
同文館出版 昭59

徳永 正三郎 (経)  
矢田 俊文 (経)  
ソフト経済の研究  
九州大学出版会 昭62

((( 利用の窓 )))

レファレンスルームから

アメリカの大学カタログ(英文・マイクロフィッシュ)の1985年版をレファレンス事務室に備え付けましたのでご利用下さい。なお、最新のもののは福岡アメリカン・センターで利用できます。

◆ 日 録 (昭和62年10月~12月)

- |  |   |
|--|---|
| <p>10. 1 国立七大学附属図書館部課長会議 於札幌<br/>10. 2 国立七大学附属図書館協議会 於札幌<br/>10. 22~23 第一回国立大学図書館協議会シンポジウム (京都大学)<br/>11. 11 国立大学図書館協議会常務理事会 (名古屋大学)</p> | <p>11. 12 国立大学図書館協議会常務理事会 (名古屋大学)<br/>12. 23 昭和63年度国立大学図書館協会受賞者選考委員会 ワーキンググループ会議 (京都大学)</p> |
|--|---|